

映画の会話に現われる男女ことばの調査と分析

曹 春 玲

1. はじめに

本研究と平行して現在進めている筆者の学位請求論文(曹 2006 予定)では、1950年から2003年までに発表された芥川賞受賞文学作品における話しことば(台詞)を基本資料とし、戦後の日本語の口語表現における男女ことばの特徴を調査している。分析にあたってはこれらの作品を3つの年代(①50年～65年まで、②70年～85年まで、③90年～03年まで)に分け、終助詞を調査対象としている。しかし、文学作品には作者の個性や言葉づかいが強く反映されていることが考えられる。つまり、小説の台詞は作家が自分の意識で創作した「書かれている話しことば」であり、必ずしも実生活の話しことばを反映しているとは限らない。

そこで、本研究ではこの芥川賞受賞作品と同様の手法を用いて、映画中に現れる台詞を分析してみることにした。映画は登場人物の言動が、実際の話しことばにより近いと考えられるからである。具体的には戦後に上演された映画を上記の3つの年代から選んで調査することにした。これら2つの研究に先行して、筆者はパイロット研究を行った(曹 2004)。この研究は、90年代の芥川賞受賞作品にのみをのめ、小説に現れる男女ことばの特徴を明らかにしようとするものであった。本研究はそのパイロット研究の結果を踏まえ、文学作品と映画で使われる男女ことばについて、それらの類似点、相違点を明らかにすることもその目的としている。

今回の研究では、さらに視点を広げ、小説と映画の比較だけではなく、50年代、70年代、90年代という年代間の比較を行う。それを通じて、動態的変化が男女の違いとして終助詞に現れているかどうかを明らかにしたい。

2. 資料と方法

1) 対象映画作品

筆者の文学作品を対象とした研究(曹 2006 予定)の年代設定(前述)に統一して、以下の3つの映画作品を選定した。

- ① 50年代:『陽のあたる坂道』(1958)。監督:田坂具隆、原作:石坂洋次郎、当時の

興行成績は第二位（4億0071万円）と監督賞を得た映画である（キネマ旬報 DB、アクセス 2004 年 12 月 www.wailerpus.com/muvie）。

- ② 70 年代：『幸福の黄色いハンカチ』（1977）。監督：山田洋次、原作：ピート・ハミル、第一位映画賞、監督賞、主演男優賞、助演男・女優賞と最優秀作品賞を得た映画である（同上）。
- ③ 90 年代：『スーパーの女』（1996）。監督：伊丹十三、脚本：伊丹十三、当時の興行成績は第 5 位（15 億 0000 万円）である（同上）。

以下では、3 つの作品を『陽』、『ハ』、『ス』と略することとする。

2) 選定条件

- ① 登場人物が日本語の標準語（共通語）を話す一般的な日本語話者であること。
- ② 特別な会話状況ではなく、ごく普通の日常生活をとりあげていること。
- ③ 該当時期の映画として人気を博した作品であること（興行成績と受賞歴で判断）。

3) 発話データの文字化

以上の 3 つの映画を録音器で録音し、会話文を文字化した。文字化の際にはイントネーションなどの特徴は表記しなかった。これはイントネーションを本研究の分析対象としなかったためである。

総発話量は、録音時間にして約 455 分（約 7.5 時間）であった。得られたデータに登場する発話者の総数（3 つの映画の登場人物¹）は 33 人（男性 18、女性 15）であり、各映画の内訳は、『陽』が 10 人（男性 5、女性 5）、『ハ』が 6 人（男女各 3）、『ス』が 17 人（男性 10、女性 7）である。実際の分析にあたっては、標準語あるいは共通語の話しことばによる男女の会話文の中に現れた終助詞のみを分析対象とし、日本語の方言は本研究の対象外とした。

3. 終助詞の分析対象項目

分析対象とする終助詞は、国立国語研究所（1991）の「現代語の助詞・助動詞」の項を参照にして選定し、「かい、だい、かしら、こと、さ、ぜ、ぞ、ね、な、の、もの／もん、や、よ、わ」の 14 項目とした。分析に際しては会話の文末の助詞を対象とし、句末の助詞は含まなかった。文末、句末の区別については、以下の会話例（『ハ』の台詞から）の通りである。

M：かっこよかったな！もう胸がすーっとしたよね！キンちゃん。

F：なんて人かね、ホント。

あたしね、（中略）けんかなんかすごーい強いじゃないかと思ったの！

その会話例の中では、「…よかったな」の「な」、「すーっとしたよね」と「なんて人かね」の「ね」、「…思ったの！」の「の」が文末の助詞、「あたしね」の「ね」は句末の助詞である。このような区別を行った上で、本研究では文末の助詞に的をしぼり、それらの使用

状況を作品・年代別、男女別に分類して、分析を行うこととした。

4. 分析結果

3つの映画²の中の会話文における終助詞を分析した結果を表1に示している。

表1: 3つの映画作品における終助詞の出現頻度

終助詞	回数			%		
	陽(1958)	ハ(1977)	ス(1996)	陽	ハ	ス
よ	394	136	260	37.2	34.8	47.6
ね	174	56	85	16.4	14.3	15.6
わ	156	4	20	14.7	1.0	3.7
な	115	71	61	10.9	18.2	11.2
の	75	64	74	7.1	16.4	13.6
さ	38	22	7	3.6	5.6	1.3
かい	25	1	1	2.4	0.3	0.2
だい	20	3	3	1.9	0.8	0.5
ぜ	18	1	2	1.7	0.3	0.4
ぞ	15	17	23	1.4	4.3	4.2
もの(もん)	12	14	7	1.1	3.6	1.3
かしら	11	0	2	1.0	0.0	0.4
や	3	2	1	0.3	0.5	0.2
こと	2	0	0	0.2	0.0	0.0
合計	1058	391	546	100.0	100.0	100.0

3つの作品の比較を分かりやすくするため、表1の作成に際しては、『陽』の終助詞の使用数の多いものを上位から並べ、実数および百分率を示した。これらを基準とし、『ハ』と『ス』の終助詞の使用数を同様に上から列記した。その結果、分析対象とした14項目の終助詞のうち、特に5つの助詞「よ、ね、わ、な、の」の出現頻度の高いことがわかった。これらのうち「な」は調査外の理由から本研究の対象外とした。残りの「よ」「ね」「わ」「の」の4つの終助詞について、それらを年代別に示したのが次の図1である。

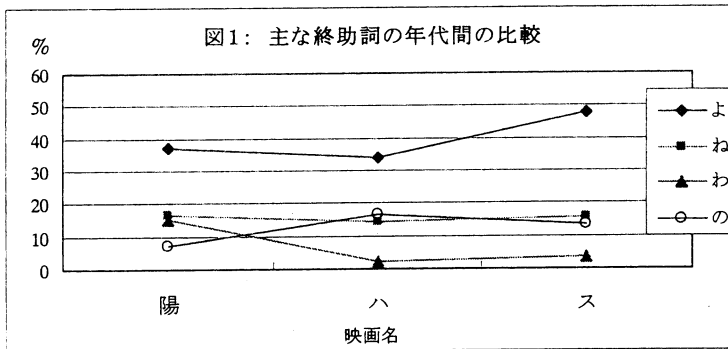


図1を概観すると、「よ」の使用頻度は『陽』から『ハ』までほとんど一直線であるが、『ス』の年代になるとその頻度が高くなってきている。「ね」については『陽』『ハ』『ス』を通じ

てほぼ一直線で、ほとんど変化がないと言えるだろう。「わ」については、『陽』では使用頻度がある程度高い(14.7%)ものの、『ハ』と『ス』では非常に低い。「の」は使用頻度が年代によって高くなったり、低くなったりしている。

図1では、男女の区別を行わず4つの終助詞の全体的な変化情況を示した。次はこれらの終助詞の使用状況を男女別にして(表2)、調べてみることにした。以下では、個々の終助詞について分析結果を述べることにする。

表2: 主な終助詞の映画別・男女別 (M=男、F=女)

該当数	陽		ハ		ス	
	M	F	M	F	M	F
よ	235	159	91	45	93	167
ね	72	102	26	30	19	66
わ	0	156	1	8	0	20
の	5	70	11	53	7	67
合計	312	487	129	136	119	320
%	M	F	M	F	M	F
よ	75.3	32.6	70.5	33.1	78.2	52.2
ね	23.1	20.9	20.2	22.1	16.0	20.6
わ	0.0	32.0	0.8	5.9	0.0	6.3
の	1.6	14.4	8.5	39.0	5.9	20.9
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

4.1 「よ」について

「よ」の基本的な機能は聞き手の知らないことに注意を向けさせることにあると言える(岡岡 2000: 167)。聞き手の注意を引く時の、「どんな感じだよ」「今日は寒いよ」のような「だよ」「形容詞+よ」の語形は男女とも用いる文末表現である(同書: 329)。従来は、このような用い方は男性的表現形式とされた。女性では「わ」を挿入して、「だからこんな感じだわよ」「今日は寒いわよ」のような「だわよ」「わよ」という語形で使用するのが一般的であった(尾田 1964: 69)。

さらに、名詞、助動詞、形容動詞の語幹などの場合、「よ」は【1】【2】のように「よ」を直接つける形が女性によく使われている。【3】のように普通体+「のよ」も女性的な表現形式とされてきた(尾田 1964: 70)。

【1】そう。ご立派よ。(『陽』F 15歳 高校生)

【2】そうよ。怠慢よ。(『陽』F 20歳 大学生)

【3】信次兄さんが考え出したのよ。(『陽』F 15歳 高校生)

他方、【4】の普通体+「よ」、【5】【6】活用語+「よ」、あるいは【7】【8】のような名詞や副詞、形容動詞の後に助動詞「だ」を挿入し、「だよ」を加えた言い方は男性に多く用いられる。

【4】僕はここで一人で食べるよ。(『陽』M 20歳 大学生)

【5】もうひとつ条件を出したんだよ。(同上)

【6】ちえっ。いっぺんに言えよ。 (『陽』M 18歳 ジャズシンガー)

【7】何百ぺん言ったって無駄だよ。 (同上)

【8】 M: どんな感じだ?

F: だからこんな感じだよ。 (『ス』50代男女の対話)

これらの特徴に着目しながら、各映画台詞における「よ」の使用状況を次の表3に示す。

表3: 「よ」の使用状況の映画別・男女別

	陽				ハ				ス			
	M		F		M		F		M		F	
よ	154	65.5	94	59.1	60	65.9	28	62.2	49	52.7	73	43.7
だよ	80	34.0	25	15.7	31	34.1	2	4.4	44	47.3	27	16.2
てよ	1	0.4	8	5.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	2.4
のよ	0	0.0	28	17.6	0	0.0	10	22.2	0	0.0	40	24.0
わよ	0	0.0	4	2.5	0	0.0	5	11.1	0	0.0	23	13.8
合計	235	100	159	100	91	100	45	100	93	100	167	100

分析の結果、次の傾向がうかがえる。

①「よ」は男性と女性では使い方が異なるが、それぞれの年代を通じて、最も多く男女ともに使用されている終助詞である。全体的に、「よ」は男性の方がより多く使う傾向があるが、『ス』では女性の使用頻度が多い結果となった。

②男性の「だよ」は各年代の使用頻度は異なるものの、それぞれの年代で頻繁に使われていることがわかる。女性の場合は50年代と90年代の使用頻度がほぼ同じである。

③各映画での「てよ」の使用頻度は、非常に少ない。男性の場合、『陽』では1例、女性は8例が見い出せた。『ハ』では男女ともこの用例はなく、『ス』では女性の4例のみであった。該当する4例を示すと、次のとおりである。

【9】どうしてよ? (2例 『ス』F 50歳 主婦・店長)

【10】コマや合びきや急ぐものから早くやってよ! (同上)

【11】早くしてよ。 (同上)

従来、この「てよ」は接続助詞「て」に終助詞「よ」のついたものであった。辞書(広辞苑、第五版)によると、単に詠嘆を表し、多く女性と子供が使うとある。たとえば、

【12】それはそれは美しくってよ。

【13】本当に立派でしてよ。

【14】だけど、今朝新聞を見た時はね、私、実に吃驚してよ…。

(【12】から【14】の用例出典は本田1990:109より)

現代日本語の「てよ」の使い方は上述の女性的な「詠嘆」の意味だけではなく、動詞の「テ形」+終助詞「よ」として依頼の意で使用されている。依頼としての「てよ」は女性だけではなく、男性にも使われる。しかし、今回のデータによると、男性の用例は『陽』の1例のみであった。

④「のよ」、「わよ」については、男性による用例が見い出せなかった。各年代の映画を

通じて、この2つは女性のみに使われており、女性表現形式であると言えそうである。

しかし「わよ」は年代が経つにつれて使用数が増えてきている。それぞれの年代における「わよ」の用例を示すと、次の通りである。

1) 『陽』1958年)

- 【15】…倉本先生と親しくなれないわよ。 (F 15歳 高校生)
【16】あ、忘れてた。もういいわよ。 (F 20歳 大学生)
【17】この人？違うわよ。 (F 25歳 ファッションモデル)
【18】わかったわよ。 (F 15歳 高校生)

2) 『ハ』(1977年)

- 【19】高いわよ。 (F 25歳 車内販売員)
【20】バカにしないでよ！あたし処女じゃないわよ！ (同上)
【21】違うわよ。 (同上)
【22】踏み切り越えたわよ。 (同上)

3) 『ス』(1996年)

- 【23】信じられないわよ。 (F 47歳 主婦)
【24】あら、でもお客様喜んでたわよ。 (F 50歳 店長)
【25】わかったわよ…。 (F 60歳 主婦)
【26】頼むわよ。 (F 50歳 店長)

これらの実例によると、50年代と70年代の「わよ」は20代の女性のみに使われていることがわかる。しかし、90年代の『ス』では、これらを使っているのは主に年配の女性である。このことは、「わよ」は今や若い女性にはあまり使われなくなっていることを示していると思われる。

4.2 「ね」について

「ね」は基本的には、聞き手が知っていると思われることがらを述べるときに使われる(松岡 2000: 164)。相手に同意を求める時に、「懐かしいね」「そうだね」のように用い、これらは男女いずれによっても使われる(同書: 329)。従来はこのような使い方は男性的文末表現形式とされてきた。一方、女性では「懐かしいわね」「そうだわね」のように「わ」を入れて「わね」「だわね」の形式で使用され、これらは現在でも女性的表現と言われている(尾田 1964: 72)。

- 【27】さっき弘前から電話があつてね。 (『陽』F 45歳主婦)
【28】ふん、兄さんたらいつでも解説派なのね。 (『陽』F 15歳 高校生)
【29】F: そしたらさ、1年も経たない間に継母が来てね。……
M: さびしかったんだね。 (『ハ』20代の男女の対話)
【30】懐かしいね。 (『ス』F 50代の女)

【31】 そうだね。

(『ス』F 50代の女)

【32】 うん！しょっちゅうよね！

(『ス』20代の女性の対話)

「ね」の詳細を分析した結果を示したのが次の表4である。

表4: 「ね」の使用状況の映画別・男女別

	陽				ハ				ス			
	M		F		M		F		M		F	
ね	53	73.6	60	58.8	20	76.9	19	63.3	13	68.4	29	43.9
だね	8	11.1	1	1.0	3	11.5	2	6.7	4	21.1	8	12.1
てね	8	11.1	7	6.9	0	0.0	2	6.7	0	0.0	7	10.6
のね	1	1.4	25	24.5	0	0.0	4	13.3	0	0.0	5	7.6
よね	1	1.4	0	0.0	3	11.5	3	10.0	2	10.5	8	12.1
わね	1	1.4	9	8.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	9	13.6
合計	72	100	102	100	26	100	30	100	19	100	66	100

分析の結果、次のことが明らかとなった。

①各年代の映画を通じて、「ね」は男性の方がより多く使っていることがわかる。

②「だね」についても、男性のほうがよく使っている。しかし、90年代の『ス』では、女性の「だね」の使用頻度が高くなってきている。

③「てね」と「のね」については、男性の場合の『陽』での男性8例と1例の以外は、『ハ』と『ス』では男性の用例が見られなかった。女性の場合、3つの映画を比較してみると、90年代の「てね」の使用頻度が高くなっているが、反対に「のね」の使用頻度は減ってきている。

④「よね」はいずれの年代においても男性の使用例はわずかである。90年代の『ス』の場合では、これは主に女性の方が使っている。

⑤「わね」については各映画とも男性の用例は見い出せなかった。女性の場合、『陽』は8.8%、『ス』は13.6%の使用率であった。90年代になると「わね」の使用頻度が増えてきているが、主に年配の女性に使われている。『ハ』では女性の用例は見い出せなかった。

4.3 「わ」、「の」について

「わ」は話し手が自分の認識、判断したことを（相手にわかってもらうために）相手に伝える文の終わりにつけ加える表現である（陳 1987：102）。また、話の内容について、軽く主張しながらも表現を和らげ、まるみをつける響きを持つ場合が多く、女性的表現とされてきた（上野田 1972：71）。以下は映画中に見い出された実例である。

【33】 そんな憲法、認めるわけにいきませんわ。（『陽』F 20歳、大学生）

【34】 でもやっぱり嫌だわ。（『陽』F 15歳、高校生）

【33】は丁寧体「デス・マス」＋「わ」で使用された用例で、【34】は助動詞「だ」を挿入して「わ」を加えた用例である。

次に、50年代の『陽』におけるのくみ子（高校生）と家庭教師のたか子（大学生）が話

している場面を採りあげてみよう。

くみ子：先生、私のお部屋見てくださる？

たか子：ええ、拝見しますわ。……

くみ子：あら、ごめんなさい。(中略)人から何を言われても割と平気なんですわ。

たか子：本当？

くみ子：ええ、本当ですわ。……

くみ子：怒ってるんじゃないの。でもやっぱり嫌だわ。今度いつか先生と一緒に
お風呂へ入ったときに見せてあげますわ。

たか子：そう。あなた明るいね。

上記の会話例は、50年代の日本社会における若い女性の言葉づかいの特徴をよく表していると思われる。読者に女性的、かつ上品な感じを与え、「わ」が女性的な響きのする終助詞であることがうかがえる。

この「わ」の用例は、『ハ』の1例以外は男性による用例は皆無である。各年代間で女性による「わ」の使用を比べてみると、『陽』における使用頻度が最も高い(156例)。『ハ』ではこのような用例は非常に少く(3例のみ)、さらに『ス』では女性が「わ」を使っているものの(20例)、それらの例はいずれも年配の女性に限られ、若い女性では「わ」の用例が見い出せなかった。

次に、「の」は、終助詞として主に女性の発話に使われる。この終助詞は疑問の「か」に変えて「の?↑」と調子を上げるところに特色があって、相手の注意を引くためにのものである(佐久間 1983: 103)。さらに【35】と【36】のように、上昇調のイントネーションを帯びて発話されるのが一般的である。これらの質問文は、女性に限らず男性にも用いられる(尾田 1964: 73)。【37】のように文末を下降調に発音すれば、この文は平叙文となり、女性により多く用いられる。【38】のように文末「の」を強く発音すると、命令の表現になり、もっぱら女性によって用いられる(佐久間 1983: 104)。

【35】 今日?それでお前はどう考えているの?↑ (『陽』F 45歳 主婦)

【36】 …どこに行くの?↑ (『ハ』M 26歳 作業員)

【37】 歌って踊って陽気にやろうじゃないの。↓ (『陽』F 45歳 女中)

【38】 あしたから学校に行くの!↓ (命令) (発音が強くする)

【35】～【38】のように文末に使われる「の」は「陽」では男性5例、女性70例、「ハ」では男性11例、女性53例、「ス」では男性7例、女性67例である。どの年代においても、男性の使用頻度は少なく、女性の使用頻度が目立って高い結果となった。

5. まとめ

以上の4つの終助詞についての年代別・男女別分析結果を「変化が認められるかどうか」を基準にまとめると次の表5³のように表わすことができるだろう。

表9: 3つ映画における「よ」「ね」「わ」「の」の分析結果の対比

	M			F		
	陽	ハ	ス	陽	ハ	ス
よ	○	□	○	○	○	◎
ね	○	□	□	○	○	○
わ	×	×	×	○	□	□
の	○	◎	◎	○	◎	◎

それぞれの終助詞の変化状況には特徴があり、「よ」は女性も多用する終助詞になりつつあること、「の」は男女ともによく使う終助詞になりつつあることが伺える。一方で、「わ」の女性による使用は急速に減少しており、今や若い人の会話からはすっかり影を潜めているようである。同様の傾向が男性の「ね」についても伺える。

ただし、これらの傾向は各年代から映画作品を1つずつ選定して分析した結果であり、必ずしも断定的ではないことを付言しておきたい。現在進めている文学作品を通じた研究では、各年代からさらに多くの作品を採り上げて分析しており、本研究の結果の裏づけができるものと期待している。

6. おわりに

以上、映画の台詞を基に口語日本語の性差について発話に使われる終助詞に焦点をあてて分析を行った。分析の結果から判断すると、戦後約60年間で男女のことばの変化をたどると、日本語におけることばの性差は徐々に少なくなる傾向にあると言えそうである。たとえば、女性が女性的な使い方「わ」の使用は著しく減っている反面、従来、男性的な使い方「だよ」と「だね」の使用は増加してきている。このことは、女性のことばが男性のことばに近づいていることを示していると思われる。一方で、男性が本来女性的な表現であった「副詞「そう」+なの」や「てね」、「のね」を使うようになる傾向も見い出せ、男性的な強い表現、例えば「やれよ」などが減少しつつある。このことは、男性のことばが女性のことばに接近していることを示している。これらが示しているように日本語口語の性差の変化は、女性の側の変化だけではなく、男性の側にも変化が認められる。

以上から、日本語の文末表現形式は、男女を問わず通時的に変化していると結論付けられるであろう。しかし、上述のように本研究の研究データには限りがあり、各終助詞が男性、女性のどちら側に変化しているのか、あるいは男女ことば双方が同じ方向に変化しているのかなどといった変化の方向性を見極めるには、さらに今後の研究が望まれる。

注：1) 各映画の登場人物の特徴は本稿末の一覧表参照。

2) 「陽」は『陽のあたる坂道』、「ハ」は『幸福の黄色いハンカチ』、「ス」は『スーパーの女』。

3) ○使う（基準）、◎使用頻度が増えている、×使わない、□使用頻度が減っていることを示す。

例文出典

『陽のあたる坂道』（1958）、『幸福の黄色いハンカチ』（1977）、『スーパーの女』（1996）

参考文献

松岡 弘（2000）『日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

尾田豊子（1964）「女性のことば—文末部分の表現を中心に—」『立教大学日本文学』13

立教大学 pp. 66-77

国立国語研究所（1991）『現代語の助詞・助動詞 一用法と実例』東京秀英出版

佐久間鼎（1983）『現代日本語法の研究』くろしお

曹 春玲（2005）「文末表現における日本語の男性語と女性語」西日本言語学会編『ニダ

バ』第34号 創元社 pp. 155-164

陳常好（1987）「終助詞」『日本語学』10月号 明治書院 pp. 93-109

映画の登場人物

①『陽のあたる坂道』

No	発話者	性別	年齢層	職業	役職／専攻
1	高木民夫	m	18歳	歌手	ジャズシンガー
2	田代信次	m	20歳	大学生	絵描き
3	田代雄吉	m	25歳	大学生	医学
4	上島けん	m	35歳	ガードマン	ゆり子の手下
5	田代玉吉	m	50歳	社長	出版社
6	田代くみ子	f	15歳	高校生	一般
7	倉本たかこ	f	20歳	大学生	家庭教師
8	かわかみゆり子	f	25歳	モデル	ファッション
9	高木くみ子	f	45歳	女中	料理屋
10	田代みどり	f	45歳	主婦	母親

主な登場人物は10人（男性5人、女性5人）。

②『幸福の黄色いハンカチ』

No	発話者	性別	年齢層	職業	役職／専攻
1	花田鉄也	m	26歳	工場労働者	作業員
2	渡辺	m	48歳	警察	係長
3	島勇作	m	30歳	炭鉱夫	炭を掘る
4	島光枝	f	28歳	パート&主婦	家庭や家事
5	小川赤美	f	25歳	車内販売員	売り子
6	赤美の同僚	f	25歳	車内販売員	売り子

主な登場人物は全部6人（男性3人、女性3人）

③『スーパーの女』

No	発話者	性別	年齢層	職業	役職／専攻
1	タケちゃん	m	25歳	店員	精肉部
2	キンちゃん	m	25歳	店員	鮮魚部
3	ミツ	m	25歳	店員	青果部
4	キヨちゃん	m	33歳	チーフ	青果部
5	店員	m	35歳	広告担当	スーパー
6	中年男性	m	40歳	社長	鶴亀食品
7	店員	m	48歳	チーフ	精肉部
8	シンちゃん	m	49歳	チーフ	鮮魚部
9	小林五朗	m	50代	専務	スーパー
10	安い売り大魔王	m	60歳	社長	関連会社
11	店員	m	65歳	店長	スーパー
12	店員	f	20歳	レジ係	スーパー
13	イクヨ	f	28歳	レジ係	スーパー
14	クメさん	f	40代	チーフ	惣菜部
15	客	f	47歳	主婦	客さん
16	井上花子	f	50代後半	主婦・店長	スーパー役人
17	買い物客	f	60歳い	町会議員の愛人	客さん

登場人物は全部17人（男性10人、女性7人）